

先ず動く！気づく！そしてまた動く！

校長 吉田 敦

実は、私は数学の教師で、30年以上高等学校で数学を教えてきました。そのとき、よくあった生徒からの質問が「これで、答えは合ってますか？」です。この質問を受けたときには、「数学は最後の答えが合っていたら『正解』というわけではなくて、それにたどり着く過程が大事！」というやりとりをよくしました。また、テスト返却の時にもよくあった「この問題、答えが合ってるのにバツになってます。」という申し出に対しても「ここが、こう…」などと説明して、不満げな後ろ姿を見送ったことは一度や二度ではありません。数学に限らず他の教科でも、正答よりもそこへ到達する過程の方が重要と考えることはよくあることですよ。

ところが、いつの頃からか、次のような質問が増えてきたように思います。自分のノートは持たずに、問題集に付属している別冊の「解答例」の冊子を開いて「ここから次の行でこうなるのはなぜですか？」です。その当時はあまり気にならず、『答えは合ってますか？』よりも、進んだ学習姿勢のように思えて「これは次に使うからこうなっていて、こっちのこれにこうするために今はこうしといて…」などと模範解答と言われる一つの解答の流れを説明していたように思います。つまり、成功例の一つをなぞっていたということです。ただ、正答へのたどり着き方（問題の解き方）は、一つではないことがほとんどです。このことは数学を含む教科学習についての話にとどまるものではなく、私たちが社会生活を送る中で直面する様々な課題を解決することについても、その解決方法はただ一つではなく、その他にも「いくつかの別の道筋がある。」ということと同様です。しかし、いくつかの別の道筋、数学で言えばいくつかの「別解」ですが、それをあと何通り、何十通り説明したとしても、それは、また別の成功例をなぞっているに過ぎません。

今、私の頭の片隅に引っかかっているのは、授業やその他の場面で、「よりよい解き方（解決方法・解決への道筋）を教える（伝える）こと、言い換えれば「失敗せずに、できるだけ早く成功にたどり着く方法」を「できるだけ多く」、あるときは「優先順位を付けて」伝え続けてきたけれども、それが果たして子どもたち（生徒の皆さんのことです。）の『課題を解決する力』を伸ばすことになっていたのか？」という問いです。

現在の社会にある様々な課題や未来の社会に現れる課題の中には、今までの取組によって蓄積されたいくつかの解決方法（成功例）の中から一番適した方法を選択することによって解決できるもの、あるいは解決に近づくことができるものもあるけれども、中には未だ解決方法が見つからない課題や、これまでの経験では予想できない、まったく突然現れる想定外の課題もあるとされています。

ですから、皆さんが本当に身に付けなければならないものは、「課題を解決する方法」ではなくて、「課題を解決する『力』」なのです。もう少し詳しく言うと、「知識として多くの解決方法を知っていて、その中からいかに早く一番適したものを選ぶか。」ではなくて、「これから直面する新たな課題に対して、いかにそのときの状況に適した解決方法を導き出し、仲間と協働して（力を合わせて）自らの役割を果たし、もてる力を十分に発揮しながら、解決に向けて取り組み続け

ることができる『力』と『態度』を身に付けることが求められているのです。念のために付け加えておきますが、『「知識」や「技能」は不要だ。』と言っているわけではありません。正しい知識はもちろん多い方がいいし、様々な経験や鍛練を重ねることによって高い技能を身に付けることはもちろん大切なことです。しかし、そのことよりも、せっかく手に入れた「知識」や「技能」を、これから直面する未経験の課題に対しても、そのときの状況に合わせて「実際に使うことができるか。」、もし、そのままでは通用しないと判断すれば、それらを組み合わせたり、工夫を加えたりして、「新しい解決方法」を生み出そうとする『力』や『態度』が身に付いているか、ということが問われるということなのです。

大谷翔平選手にバッティングを教えてもらっても、誰にもあんなホームランは打てないと思います。ピッチングについてもそうです。今春のWBC決勝でトラウト選手を三振に取ったラスト・ボールのスウィーパーはテレビで見ていると本当に凄いボールでした。いきなりの話題の展開ですが、私はここで『誰も大谷選手のような野球選手にはなれない』ということをお願いしたいわけではありませんし、また、『努力を重ねれば、皆さんも大谷選手のようにになれる！？・・・』と続けたかったわけでもありません。ここで、私が皆さんに伝えたいことは、大谷選手のプレーや言動を見聞きしていると、『新たな課題（目標）にも正面から解決（達成）に向かって挑み続け、“自分にしかできない理想の自分になりたい、近づきたい。”という「強い気持ち」と、これは自分で決めて自分が目指していることであって、それが“どんな結果に終わろうとも、絶対に他人のせいにはしない”という「潔さ」をひしひしとを感じる。』ということなのです。二刀流と呼ばれるバッティングとピッチング、また、走塁などのプレー自体からももちろんですが、WBC大会中などに発した言葉や、野球選手として、特に投手としての活動に一定期間の制限を要することになり新しい契約や選手生命にも影響しかねない2回目の肘の手術を即座に決意したことも、大谷選手の思いがもしこの通りだと考えると、私には心底納得のいく行動だと感じられるのです。あまり勝手な事は言えませんが、万が一この肘の手術の結果がこの先の良好な結果につながらなかったとしても、彼はおそらく「医師のせいにはしない。」のではないのでしょうか。

更には、もはや彼は『自分一人だけの成功は求めていない』ように見えます。彼が『理想の自分に向かう』行動様式には、その過程や結果において発生する利益（のようなもの）は決して彼一人だけに還元されるのではなく、彼が属する社会（例えば、所属チームやMLBをはじめとする野球界、スポーツ界、さらには・・・）にも、大きく還元されるという「仕掛け」というか「意図」が感じられるのです。これには「自分の目指すものは、みんなで挑み、みんなで手にするものの中にある」という彼なりの「定義」のようなものが反映していて、同時に「それは、自分一人ではできないことではない」ということを彼が的確に察知している証だと思います。誰にとっても、「成功」や「理想の自分の実現」は自分の力だけでは不可能なことです。そのためには、周囲の理解や協力に加え、我々を取り巻く「社会」が「より良く発展すること」も必要なのです。このことをも、彼は十分に理解していて、ただ、そうであるならば、『その「社会」をより良くすること』にも『自ら積極的に関わっていく』という確固たる「意志」が彼にはあって、それがこれら一連の言動をとらせているのだと思います。

皆さんも“自分にしかできない理想の自分”になるために、日々の取組があるという事に是非気づいて欲しいと思います。そして、『理想の自分になる』ために必要な『力』を身に付けてください。ヒナ鳥のように口を開けて待っていても、その力はやってこないと思います。自分自身が、先ず動いて、気づき、そしてまた動く。時間はたっぷりあります。まだまだこれからです。